若越郷土研究　五十一巻一号

グリフィスの福井民話

山下英一

明治4（1871）年3月、グリフィスは福井藩の藩校、明新館の教師として城下町福井に第一歩を踏んだ。しかしまもなく明治政府による廃藩置県という行政上の大変革があって、グリフィスは翌5年1月、封建制度の崩壊による人心の混乱の渦中に福井を離れた。フルベッキという南校の教頭からの強い要請で南校の教師になって東京へ向かったのである。お雇い教師としてグリフィスと福井藩との契約に関するすべての采配はフルベッキにあった。

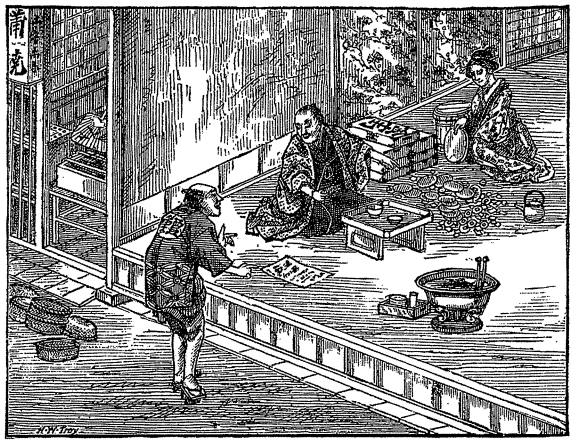
明治期になって欧米人の日本往来が盛んになり、英語で書かれたものだけでも日本および日本人に関する様々な分野の出版物が続出した。そこで問われることの一つに執筆者の滞日期間の長短があった。明治9（1876）年に出版されたグリフィスの *The Mikado's Empire* は米国の知識層に大きな反響を呼んだ。しかしその著者の日本滞在が5年足らずで、しかも教師という限られた青年層を相手の仕事に従事していたところから、経験不足と称してその著述を軽視する意見の人もあった。そういう言わば皮相な見方に優る書き手の観察、視点、それに認識の如何が問われるべき時代であった。

'Japanologist' は「日本学者、ジャパノロジスト」のように用いられる1881年の新語。'Japanophile' は「親日家、日本びいき」のように用いられる1904年の新語である。グリフィスの *Japanese Fairy World* が出版されたのは1880年。牧師を辞めて著述に専念すると決めたのが1903年。*The Mikado's Empire* の帰結的続編とみなされる *The Japanese Nation in Evolution* の出版が1907（明治40）年とつづく。して見ればここに日本学者にして親日家の典型を見る人物としてグリフィスが浮き彫りされてくる。

しかもその理由が何処にあったかと探りを入れるとき、グリフィスの内面に生起する異質なものへの緩和力に行き着く。留学生日下部太郎の生国であることで、多少の親しみもあって福井の生活の体験が始まる。「日記」、「姉への手紙」が残されていて、27～8歳の青年の自立する精神に降りかかる困難、それを超えて手にする幾多の歓喜をも感じ取れよう。そこで簡単に、グリフィスの日本びいきは福井を源流にして始まったと言ってもいい。

たとえば、*The Mikado's Empire* 第2部の第13章「民話と炉辺物語」には、福井の学生から聞いた話として、小咄が入っている。けちんぼうな商人がいて、うなぎ屋の隣に越してくる。想像力の強い男で、蒲焼のにおいを楽しんで食事をする。それを知ってうなぎ屋はにおいの代金を請求してきた。そこで商人は銭の入った袋を鳴らして、驚くうなぎ屋ににおいの代金は銭の音で支払ったと言った。*Japanese Fairy World* には 'Smells and Jingles'「匂いとじゃらじゃら鳴る音」の題で、挿絵もついて、この江戸っ子とうなぎにまつわる庶民の人情話が入っている。グリフィスによるとこの日本民話集には「大名の城内で見た生活の美しい面、滑稽な面、もったいぶった面」からヒントを得た話が数編ある。そこでまず、一体グリフィスは民話の「妖精」と称

する‘fairy’をどう考えていたか、またこの文学のスタイルで何を表現しようと思ったのか、それから福井の生活から生れたというグリフィスの福井民話について考える。それはまた生涯にわたり外国に向けて日本の解明に尽くしたこの親日家の偉業にいくらかでも近づくことになろう。



「匂いとじゃらじゃら鳴る音」
グリフィスの雇った絵師大沢南谷 筆

Fairy Tales とは

いわゆる「民話」と称する西洋の‘Folk-Lore’は風習、妖精、幽霊、魔女、伝説など民間に流布してきて、今日、われわれが読み聞きできる形で残っている文学的説話の総称と思われる。記録によると、folk-lore の宝庫とされるアイルランド、ウエールズ、スコットランドの島国には民話の成立に共通性がある。その中から妖精にあたる fairy の特色について述べると、妖精は自然と超自然が溶け合った湖、谷、森などに住む、キリスト教徒でなかったが善良さの故に地獄に投げ込まれなかった、小さくてかわいい生き物であった。姿は人であって不死、見えない霊になる。人に優しいが、邪険にされると復讐する。月夜に踊る「妖精の輪」は鶏が朝の時を告げるや消えるといわれて、人がその輪に入ると不幸がふりかかる。また妖精の娘は人間の若者にぞっこん惚れられて結婚するが、娘が男に禁じたことを守らないと消え去るという。

ラフカディオ・ハーンの‘Hi-Mawari’は、二人の少年が「妖精の輪」の跡を探すところから始まる。そこは夏のウエールズ、松林の丘。みすぼらしい竪琴弾きが現われてウエールズ語の歌をうたう。その声に少年は魔法にかかった気持ちになった。それから40年後、日本にいるかつての少年が、向日葵を見て昔の竪琴の歌を思い出した。太陽神の動きのままに向きを変える向日葵の歌であった。そばに妖精の輪をいっしょに探した優しい美少年が立っていた。その少年は若くして不慮の事故に遭い、命に代えて人を救った立派な人であった。この不思議な話は１９０４年に出版のハーンの『怪談』の一編であり、妖精がテーマの自伝的体験であったと思われる。

グリフィスの *Swiss Fairy Tales* 『スイス妖精物語』は１９２０年に出版された。24編からなり、高山アルプスの天然の美しさに相応しい妖精と人間の交流の話が明るく展開する。その１つが禁断を破った男の破滅の話。村の勇敢な猟師の美青年は美しい妖精にぞっこん惚れてしまった。妖精は高嶺を下りて人間の家に住み、老いて死ぬのはごめんだったが、若者の熱意にほだされて結婚した。妖精は極上のチーズをいつも少し食べ残す約束をチーズが大好きな若者に守らせた。ある年の

冬、猟に出て手ぶらで戻った男は空腹と気落ちのせいで貯蔵室の残りのチーズに手が出てしまった。考える人から貪婪な獣と化した男を見て、妻は見る間に妖精の姿になり、別れの羽根をふって飛び去った。男は不幸と空腹と良心の呵責のうちに1人残された。この妖精物語はグリフィスが子供のとき、母方の先祖でスイス移民の婦人から聞いたなつかしい炉辺話にもとづくという。

それでは日本に妖精が居ただろうか。妖精の話が残っているだろうか。否と答えるだろう。日本の「民話」に妖精に代わる話を見出すことができるだろうか。これも否であろう。それなのにグリフィスは日本民話 'Japanese Folk-lore' をあえて 'Japanese Fairy Tales' としたと考えられる。このアイディアの意図はどこにあるのだろうか。勿論のことそれらの話を調べることから始めなければならない。しかし同時に日本という異国の文化遺産を未見の国に解明して英語で伝えたい、そのための創意工夫がグリフィスにもあっただろう。ところがそれには先駆者がいたのである。

ミットフォードの *Tales of Old Japan*

日本の英国公使館に勤務の書記官A.B. Mitford（1837～1916）はその4年の滞日期間を経て1870年に帰国した。その翌年に出版したのがこの日本昔話であった。忘れないうちに付け加えると、ミットフォードの帰国の年に入れ違ってグリフィスが来日する。以下は *Tales of Old Japan* のなかの著者の記述による。「大君の幕府は正体がばれることを恐れて、外国人が日本の書物や記録を調べるのを妨害したが、明治政府になって日本語の習得が自由になると、その国の文学や歴史についての知識が高まった。しかし政治的、社会的変革にともなって消えていく珍しい文明のあることも知り、それを記録保存して世界に日本人の内面生活についてしらせたい。その手段に人口に膾炙している昔話の収集とそれらの翻訳が最適であった」。

ミットフォードは日本語習得に進歩が見えてきた1867年も終わり近くなって、話の収集の仕事に入った。そうして熱心に集められた話はすでに堪能になった日本語の能力とあいまって英語に翻訳されていった。かくして30の話が採用された1冊全383ページの英文日本昔話の上梓を見ることになる。「序文」において、なによりも日本語の苦労はそれをした人にしか分らないと語られるのを読むと身に摘まされる。これらの話に言及のない社会的身分に「天皇と皇室」と「郷士」という土着の武士をあげて断っている。また新しい日本に生まれ変わったといっても封建制度の消滅の保証は誰にもなく、大和魂 'Spirit of Old Japan' というサムライ魂もこの国から消えてなくなってはいないともいう。これはミットフォードが在日中に切腹を目撃していて、その感想である。

全30話のなかに「妖精物語」'Fairy Tales' のページが20ページあって9話を含む。即ち「舌きり雀」「文福茶釜」「かちかち山」「花さか爺」「さるかに合戦」「桃大郎」「狐の嫁入り」「坂田金時」「こぶとり爺さん」。題名からでも分かるがどれも有名な日本の昔話である。このうち「舌きり雀」「文福茶釜」「さるかに合戦」「桃大郎」「坂田金時」はグリフィスの *Japanese Fairy World* にもある。この副題 *Stories from the Wonder-lore of Japan* の

'lore' が示すように「言い伝え」「教え」という点ではたしかにどの話も、妖精の話にも教訓的暗示がある。それではグリフィスがミットフォードをただ見習ったに過ぎなかったのだろうか。

「舌きり雀」のミットフォード版 'The Tongue-cut Sparrow' を読んでみる。「昔々、心のやさしい爺さんがスズメを飼っていたが、洗濯の糊を舐めたので、意地の悪い婆さんがスズメの舌を切って放してしまった。むごい話にひどく悲しんだ爺さんはスズメを探しに出た。再会がかない爺さんはスズメの宿でご馳走になった。帰りのみやげにもらった軽いつづらは宝ものでいっぱいだった。しかし欲張り婆さんが希望したつづらからはいたずら小鬼、お化け、小妖精、小人が飛び出して婆さんを苦しめた。爺さんは養子を取って家は栄えた。めでたし」。この訳文の趣旨と展開はもとの説話に忠実である。ミットフォードが日本昔話で意図した開明的考えが十分にうかがえる。しかし重いつづらから出る「蛇、蝮、百足」を 'all sorts of hobgoblins and elves' といった「妖精」にしたところが興味深い。そのうえ婆さんはつづらの中の蛇などに殺されるのに、そこのところが曖昧になっている。グリフィス版 'The Tongue-cut Sparrow' は話の筋において違いはないが、話をより論理的に、より面白く読ませるための創意工夫がほどこされている。もともと炉辺ばなしは非論理性に特徴があり、話を手短に進めて聞くものになんらかの感情を呼び覚まして、最後に教訓めいた印象を植え付けるのが使命である。その点グリフィスの「舌きり雀」は枝葉に配慮して文飾に優れ、これを読む外国人に日本的異国趣味の目を開くのに役立ったと思われる。

言ってみれば理屈っぽい。この辻褄を合せるということではグリフィスは話の始めに婆さんのどこが意地悪いかを説明して、終わりに婆さんが死んで、養子を取った話をなるほどと納得させる。婆さんは子供を生もうとしないばかりか、養子を取るのも面倒がる女であった。爺さんが歓待された「雀の宿」でのことが全頁の三分の一を使って楽しく描写される。さらに重いつづらの蓋を取ると、いか、鬼、骸骨が次々と襲いかかる。最後は頭の大きい・舌をたらし・毛のある蛇が婆さんに巻き付いて窒息死させてしまう。おそらくグリフィスは「雀の宿」に妖精の世界を託して超自然のものとして、実は日本人の家と家族の奥ゆかしい暮らしぶりを知らせることも意図したと考えられる。

グリフィスの *Japanese Fairy Tales*

日本昔話集をグリフィスは3冊出版した。以後、作品名は①②③で表わす。

① 1880（明治13）年。*Japanese Fairy World: Stories from the Wonder-lore of Japan.*

② 1908（明治41）年。*The Fire-fly's Lovers and Other Fairy Tales of Old Japan.*

③ 1908? *Japanese Fairy Tales.*

出版 ① James H. Barhyte. Schenectady, N. Y.
② T. Y. Crowell & Co. Publishers. New York
③ George G. Harrap & Co. Ltd. London, Calcutta, Sydney

作品数
①304頁 35編 「序文」に34編とあるが「目次」に 'The Waterfall of Yoro, or the Fountain of Youth'

pp.218–222の脱落
②166頁　20編　ただし①から17編
③から新作3編
③219頁　28編　ただし①から20編
②から新作1編　新作7編

従って全作品46編、つまり①で35編を発表し、28年後の②＋③で①からの17編に新作11編を加えた28編を発表した。作品が生れるには其れなりに個人としての歴史的背景があり、その背景が作者をして前作の見直しを強いることになって、改作や新作の追加にいたらざるを得なくなる。グリフィスの日本昔話の場合もそうであったと考えられる。ここにその例を2つあげて作者の創作の内面について考えてみたい。

'How the Jelly-fish Lost its Shell' ①日本列島周辺の海にはくらげが無数に群をなして生息している。くらげは殻や骨や皮がないのでいつも危険に晒される。巨大くらげもいる。直径が2～3フィートもあるくらげが浜辺にやって来る。大きな男の子ぐらいに重い。大名の傘のように立派で、その日本の日傘のように色鮮やかな身体のまわりには、宮廷の婦人が着けるリボンのような触手が浮かんでいる。ところが可哀そうに大波や突風にあうとひとたまりもなく潰れる。新しければそれを切ってご飯といっしょに食べる人もいる。日光にあたると2～3時間で水の固まりになるが、夜、岸に打ち上げられたくらげが燐光をだす。これが「竜の光」と呼ばれる。ところが昔はこの無防備なくらげにも殻が着いていた。ここからグリフィスの「くらげが甲羅を失くす話」が始まる。

くらげについての上記の文は要約であって、実はもっと比喩的、科学的表現に富んでいて興味深い。しかし自然や人間にたいする穏やかで鋭い観察はここでもすでに「竜の光」"dragon's light" をとらえていた。なぜならグリフィスにおいて「竜」は日本の妖精そのものであった。竜宮 'The Palace of the Dragon King of the World Under the Sea' は①によく出る妖精の竜の住まいであった。余談になるが、巨大くらげは近年、福井県の日本海沿岸に現れて漁業を妨害すると騒がれるエチゼンクラゲと同じ種類のくらげで、福井にいたグリフィスがその存在を知っていたと想像される。とすればエチゼンクラゲをこのように記録した最初の人はグリフィスであったとさえ言えよう。

このくらげの前口上は②③では消えて、昔、くらげは竜宮で「海の国のお后」に仕えて堂々としていた、というところから話は始まる。以下はあらすじ。「いくら手を尽くしも高じるばかりのお后の病気に猿の肝が効くというので亀が山へ猿を生け捕りに行く。亀は陸にも水にも住めてお后の使者であった。木の下で寝たふりの亀にいたずらする猿の群の一匹を足に食いついてしとめ、脅しながら竜宮に連れ帰る。お后は猿の身を気の毒に思って大いにもてなす。肝のことを知らずにはしゃぐ猿を哀れんだくらげはホームシックの猿に訳を話す。＜肝を潰した＞猿は一計を案じて、雨降りに亀に泣いて見せて山の木においてきた肝がこの雨で腐るので取りに行きたいという。この猿知恵にまんまとかかって亀はお后から叱責を受ける。誰か家臣か召使が猿に肝のことを話したにちがいない、ということでお后に仕える全員の召集をかけたところ、くらげだけが現れないので、お后の信任

を裏切った罪にたちどころに甲羅を剥がれる罰を受ける。くらげは赤裸にされて告げ口屋'telltale'の汚名を着せられて居なくなる。末代までくらげは無防備である」。原文には「手を尽くす」「生け捕り」「もてなす」「はしゃぐ」「猿知恵」にあたる箇所は具体的におもしろく表現してあって読ませる。グリフィスは竜宮を妖精の世界と見做した。

この種の話にはヴァージョン（異形、改作、翻案）がつきもので、「猿の生ぎも」「猿の肝取」と呼ぶ同様な話もある。前者は病人が神さまのひとり娘、猿を探しに行くのは犬、猿に告げ口するのは蛸と針河豚、罰として蛸は骨を抜かれ針河豚は針だらけになる。後者は病人が竜王、猿を迎えに行くのはくらげ、肝のことを言うのもくらげ、連れて来られずに竜王の家来に叩かれてくらげは骨なしになる。一説にくらげが亀に変わる。グリフィスもこれを知っていて①のなかに挿入している。亀を怪しんだ猿たちはうたた寝のところを捕まえてひっくり返し動けなくしてから下になった甲羅を剥がした。亀はやっとのことで竜宮へ帰った。この思いつきは肝取りを怪しむほどの医学的知識が猿にあったといわすためのもので、話としてはいただけないと述べていた。しかしこの挿入箇所は②③で削られる。『猿の肝取』の話は本来インドの話であったのが中国、朝鮮、日本へと伝播したなかの一つであった。

'The Travels of Two Frogs' ①　日本での読み物がディケンズの小説や『東海道中膝栗毛』であったように、グリフィスは通俗的な人情や滑稽を愛する青年であった。この話は最初、運河に橋の、せわしい商業都市大阪とミカドの御所がある、美しい京都について簡単に述べる。「西洋文明の到来前、蛙が二匹、京都の井戸と大阪の蓮池にそれぞれ住んでいる。＜井の中の蛙大海を知らず＞と聞かされ、蛙は井戸の半分もないと思う大海を見に出る。蛙の妻は朝夕のお膳に夫の食事を用意して帰りを指折り待つ。旅の蛙は変に思われないよう後ろ足で立って歩く。同じ頃、大阪の蛙は蓮池の暮らしに不満で、＜獅子の子落とし＞を決意する。この大言壮語'tall talk'にはわけがあって、池の周りの寺院で坊さんが古典のテクストを議論するのを聞くうちに思い煩うことの好きな哲学者になっていたのである。＜蛙の子は蛙＞、いや＜黒い泥から蓮の白い花が咲く＞、坊さんのこの問答に感心した蛙は、賢い子になれと息子を京都へ旅にだすことにする。京都の老いた蛙と大阪の蛙の子が出合った丘はちょうど2つの町の間の真中にある。挨拶を交わして名のるうち、腰が痛くてもう行くのをあきらめここから眺めるだけにするという井戸の蛙に蓮池の蛙が同感する。ところが蛙の目の向きは這えば前向き立てば後ろ向き。背中合わせに伸びをして井戸蛙の見た大阪は京都と同じ、大海は信じない。蓮池蛙の見た京都は大阪と同じだといって、親蛙の考えを莫迦にする。結局、やっぱり蛙の子は蛙。蛙に哲学は＜蛙の顔に水＞である。やっぱり汚れなき花びらを、笑む天に向いて開き、黒い泥から神々しいまでに清く咲く白い花、それは生命と復活の象徴」。

この話は②③にも入るが、もちろんこれにも修正がある。特に最後の泥に咲くはす花と象徴の箇所は削られた。そこにはキリスト教的意味合いの「復活」'resurrection'が本文の日本の仏教の話とそぐわないからでもあろ

う。旅立つ老いた蛙を見送る妻の心遣いなどにもグリフィスの日本を見る眼がある。*The Mikado's Empire* には「日本のことわざ」の1章があるが、「一国のことわざはその国の性格をうつす鏡である。簡潔な言葉の凝縮された知恵の中には、その国の精神や機知ばかりでなく、偏見、愛情、憎悪、そして行動や道徳の基準がすべて忠実に反映されている。」と述べ、「井蛙」の諺について「時代遅れの人や旧弊主義に対して使うしっぺい返しの方法として広がっている。」と書く。それらの諺を巧みに活用し、人間になじみ深い小生物の戯画化に成功した「2匹の蛙の旅」は民話文学の傑作ではなかろうか。日本版『スウヰントン第四読本』*Swinton's Fourth Reader* 1888（明治21）年、発行人　戸田直秀、に　23.—The Travels of Two Frogs. がA Japanese Taleとして、簡略された英文で掲載された。

城内で見たことがヒントの　Fairy-tales

はしがきに書いたが、グリフィスの日本妖精話には福井の城内で見た生活から連想された話がある。②③のはしがき'Open　Sesame'にそれらのタイトルが明示してある。（イ～へは明示の順）

イ　'The Fire-Fly's Lovers'　①　初出
ロ　'The Child of the Thunder'　①　〃
ハ　'Little Silver's Dream'　①　〃
ニ　'Lord Cuttle-Fish's Concert'　①　〃
ホ　'Lord Long-Legs' Procession'　①　〃
へ　'The Gift of Gold Lacquer'　②③　〃

イ　「蛍の求婚者」の要約。蛍狩りの日本の娘と蛍かごの光に魅せられた虫の求婚に始まるラブ・ストーリー。「越前、福井城の南の濠に咲く蓮花に蛍の王が住む。娘の蛍姫はその火が花を黄金に照らす年頃になると外出を許される。しかしいかに多くの崇拝者があっても娘に結婚の意志がない。求婚してくる者には無理難題を課して撃退する。黄金虫（a golden beetle）、光る虫（a shining bug）、赤とんぼ（a scarlet dragon-fly）、甲虫（the Beetle）と続いてくる虫に結婚の条件に火を求める。甲虫は光がもれる障子にとび込み頭を釘で刺して事故死。黒い虫は貧しい学生のランプの菜種油にはまって溺死。赤とんぼは針仕事中のつましい主婦のランプの火屋に落ちて焼死。蛾（a hawk-moth）はろうそくの炎に羽を焦がして悶死。衣蛾（clothes moth）はろうそくの芯のなかを登ったところで圧死。不幸な目に遭う者こそあれ火を持ってくる成功者はない。猫の目の細いみどりの火を求めてかみつかれるのもいる。あくる日はたくさんの葬式が出る。そこへ北の濠の蛍の王子、火麻呂から姫に結婚の申し込みがある。王子は光の大部隊を率いて現れるが、姫の美しさは色褪せることなく、めでたく結婚する」。

日本の娘が蛍をかごで飼うのは、虫の恋の合戦を眺めながら火の中水の中をものともしない恋人に焦がれるからである。絶対的「美」の存在に挑戦する無謀で哀れな「醜悪」なるもの。ここにグリフィスは日本人の伝統的倫理観を見据える。醜悪とは自慢、卑劣、粗野、遠慮、諂い、法螺、泣き寝入り、愛の押し売り、身分、財産、見せ掛け、余興の類である。一方で学生や主婦といった市井人の暮らしにも目が行く。蛍を人間の生れ代りの霊とする昔話もあるが、グリフィスは竹取物語のかぐや姫を思わす妖精の求める美の

こころを寓話にした。

ロ　「雷の子供」の要約。「白山が見える越前の山に、貧しいがよく働く百姓の老夫婦が住む。養子に家を継がせたいが貧乏なので、子供好きでも養子がもらえない。山の上方から落ちる細い流れが小川になる谷間に水をせきとめ土を運び、20年の労苦の後に棚田3段をつくる。しかし老夫婦にとって夏の旱魃や収穫の半分の租税はあまりにも厳しい。ある日照りの夏、にわかに雷雨があって恐ろしい光に目がくらむ、と耳を聾する音がして落雷。無事を仏さまに感謝する。ふと足元に元気にはしゃぐ男の子がいるのでつれて帰り、この雷神の贈りものを雷太郎と呼んで養子にする。親の言うことを聞く優しい子供になる。家計も楽になる。大神楽が村に来ても、雷太郎だけは父の畑で空を眺め、小川で遊ぶ。成人になる18歳の誕生日に、雷太郎青年は別れを告げると見る見る小さな白竜になって飛び去る。両親の見ている前で竜は大きくたくましくなって現れると銀の城のような入道雲の中へと消える」。

山下　グリフィスの福井民話

グリフィスの日本の妖精は竜宮の海を住処とするが、珍しくこの話の妖精の竜は雷神の住む空にいる。この美談には次のような後日談がある。裕福な暮らしのうちに死んだ夫婦は村の火葬場の炉で白骨になった。遺灰はいっしょの骨壷に入り寺の墓地に埋葬された。その苔の生えた墓には白竜が彫られ、今でもこの小さな村の古い墓石の一つになっている。グリフィスは福井で実際に火葬の現場に立ちあい、観察したことを詳しく手紙で姉に知らせた。棚田になるまでの過程の描写も適切、今も季節にやってきて子供を喜ばす伊勢の大神楽も見ていたに違いない。

ハ　「お銀の見た猩猩の夢」要約。夕飯に腹いっぱい赤飯を食べたお銀に、乳母は幽霊の話をして聞かす。しかし娘が幽霊の夢を怖がるので、乳母は悪夢を食う獏の絵を描いた紙を枕に巻く。瀬戸内を大阪に向う帆掛け舟の夢の旅が始まる。「海には幽霊がうようよいる。幽霊に乞われて船乗りが柄杓を渡すと、一晩じゅう舟の中の水をくみ出すのだが柄杓には底がない。朝になって通り過ぎる島の浜辺に大きな壺に杓子と赤い漆塗りの盃が置いてあるのが見える。しわくちゃ顔の小さい老人が大勢で浜に現れる。赤茶けた髪、真赤なたれ髪の赤鼻で赤ら顔の老人が多い。老いも若きも子供もてんでに壺から酒を汲んでは飲む。ひとしきり飲んで滑稽な踊りがある。一休みしてそれを繰り返すと、赤鬼のような顔の年配の一声で左官の仕事がはじまる。お銀が船乗りに訊くと、猩猩の蔵が建つという。猩猩が酒を飲ませて人間から取り上げる生命、健康、幸福、財産をそのなかに貯蔵するのである」。

ちょうどこのとき舟が岩に当たった。その拍子にお銀は悪夢から覚めた。お銀は幽霊が水を汲む空しい仕事がこっけいに思えて笑い、漠が夢を食うと思う乳母がおかしくて笑った、と思う語り手の「私」がいる。夕食の赤飯も「私」が知っている。この赤色が話に統一を与えている。②③で 'Little Silver's Dream' と変更になり、書き直しが目立つのはグリフィスにも不満な作であったようだ。酒の飲みすぎを見ると、お銀は猩猩の怖い蔵を思いだす。現実に怖い話もその裏を返せば

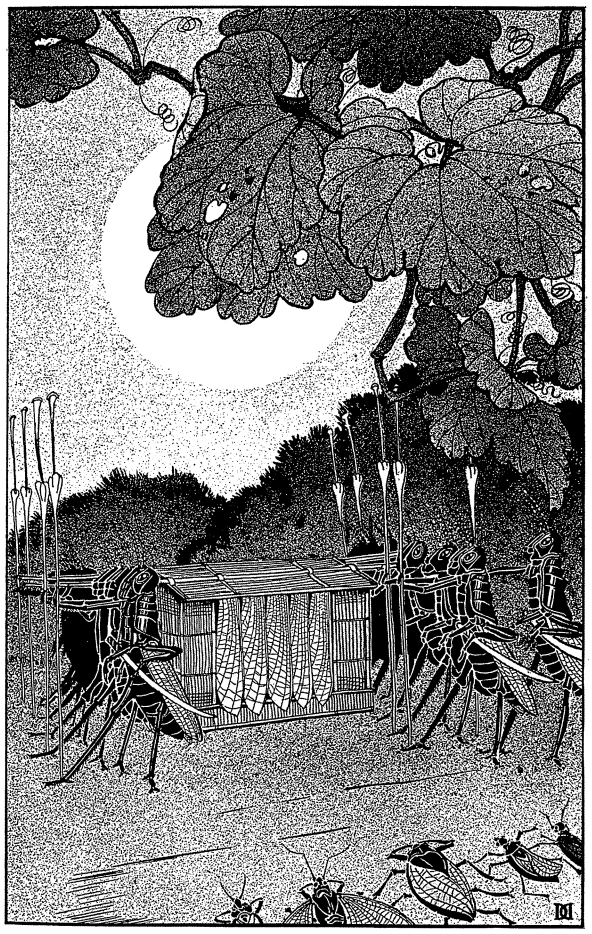
こっけいな話。左官が海中の貝から壁土を作る工程は福井生活の経験にもとづく話であり、特に日本人の飲酒の習慣についての良心的感想ともとれよう。

ニ　「イカ卿が音楽会を開く」要約。イカは体が短く、厚い石灰質の甲をもつモンコイカ（cuttle-fish）と体が細長く、薄い軟甲をもつヤリイカ、スルメイカ（squid）に分かれる。この話は先述の甲羅を失ったくらげの話‘How the Jelly-fish Lost its Shell’につづく。ところは同じ竜宮で猿の肝取りに失敗したが、お后は元気になって職務につく。それを祝って城内中が顔に白粉をして鳴り物入りで喜ぶ。しかしお后は傍観者になった。「お后の部屋のすべてが珊瑚などのピンクの装飾で占められる。奇妙な音楽が聞こえる。医者のイカ卿の屋敷から聞こえるその音にお后は好奇心を起こすが、夜に人前にでて、お供なしに行けば威信にかかわる。しかし好奇心に負けてイカ卿の庭のフジツボなどの固着した岩の上。滑稽な光景に息切れするほど笑い転げる。イカ卿が高さ6フィートの頭を下にして楽譜を読みながら、ギター、鼓、太鼓を同時に演奏して替え歌を金切り声で歌う。なにより滑稽なのは、聴衆もいっしょに演じる。鰭で調子をとって歌う鯛、声をからすガッジョン（gudgeon）、アルトのガー（gar-fish）、ベースを歌い合唱を指揮する大蛙、猿の肝取事件に憤慨している鯖（mackerel）、練習でのどの渇く河豚、鰯（herring）、オーケストラの士気をくじく茶菓子に片目が行くえい（skate）、歌い続けるスッポン、茶菓子のためにコーラスを続けるこばんざめ（sucker）、やがて音楽が終る。すると逆立ちのイカ卿が6本の穴だらけの腕を旋回して仲間を面白がらす。海老が譜面を照らすろうそくの残りを食べる。祝宴が始まる。イカ卿の召使は猿と亀の中間の河童であるが、かわいそうに目出度いやつで猿に似ていても肝は薬にならないことを知らない」。

宴たけなわにお后は笑いこけながら宮殿に帰るや寝てしまった。イカ卿は大飯喰らいと鯖に言われるほど食べて、酒を一気に飲むと丸まって寝てしまった。翌朝は二日酔い。②③では‘Lord Cuttle-Fish’s Concert’に改題して、お后に音楽会と祝宴がなによりも薬になったとこの話を締めくくった。笑いは薬。なおギターは三味線、歌は民謡、はやり唄。福井の人の陽気でしたたかな一面を妖精が演じる西洋風の音曲話に仕立て、グリフィスはそれを絵画的作品にした。

ホ　「大名、脚長殿の行列」要約。越前大名、収入は稲1万束。家来はいなご6千。重臣はかまきり、甲虫、バッタ。使者はホタル、トンボ。越前の虫の総数は虻、蟻、蚊、ダニをいれて数百万。奥女中はてんとう虫、蝶、コガネムシ。「頃は5月、大名が江戸の将軍に参勤する。出発に先立つ準備の一週間、洗い衣、磨きのかかった刀槍などをやぶ蚊が検査する。脚の花粉を落とすマルハナバチ（bumble-bee）。行列引率のセミ（locust）がスズメバチの巣紙（wasp-nest paper）を読む、「花の蜜を吸うため休憩外は列を離れるな」。手足が短いので旅に出られないコオロギ。出発は朝6時。時刻係りは蚤、城の番屋に住む猫の背中にその家があるので、その時刻を猫の目の開きで知ると蚤から蚊、蚊から

屋敷の門番のみずすまし（whirligig）へ伝える。定刻、城門を出る行列。召使が大名の駕籠を土下座して見送る。行列の後尾を守るめくらぐも（daddy long-legs）。先頭のかまきりの命令で土下座する蟻、南京虫、とかげ、ヒキガエル、池のどろがめ、みみず、甲虫の幼虫（grub）、身を折り曲げる尺取虫（inch-worm）。行列は提灯持ちの蛍、朝顔の傘を持つぞうむし（weevil）、槍持ちのいなご、駕籠の前を大名の紋章をかかげるかまきり、厳かに歩む僧侶の甲虫。沿道の見物。おおきな話し声のないなかで、「かまきりが戦斧で戦車に突撃するように見せて色目を使う」と揶揄するけら（mole-cricket）。駕籠は草と竹を編み、トンボの翅が窓になる。ボディガードのいなごは武装を固め、まさかに備えて有毒の草の芽を所持する。スズメバチの列の間に蝸牛に先導されて、馬具、馬飾りの整った虻（horse-fly）が行列の進度を調節する。後部は大君への贈物、東海道の不安な宿に備える大名好みの調度品が威厳のある列をつくる。使者は先回りして宿泊所に他国の蚤、蜘蛛、蚊が泊まらないよう警戒する。めくらぐもが後ろで野次馬の無礼と不敬を取り締まる」。



「大名、脚長殿の行列」　筆者不明

大名行列が通り過ぎてにぎやかな往来に戻ると、道はきれいに片付いていた。②③で題名を 'Lord Long-Legs' Procession' にしたグリフィスは行列見物の立場からの挿話を加えた。「お殿様はどんな方?」、見えなかった幼虫が母親の蝶に問う。「お母さんも、誰も見ていないわ。」見たのは駕籠だけ、だがやっぱり立派な行列であった。大名の政府の士分を大名行列に例をとって鳥瞰的に縮図化している。士族と庶民を昆虫などに見立てた社会の戯画化は妖精の世界から程遠くて珍しくはないが、細かい工夫を必要とする。「紙」では通らないから「スズメバチの巣」に着眼した。しかも話を多少大げさにしようとすれば適当なユーモアが不可欠であろう。福井にいたとき廃藩になったが、大名文化に名残を惜しみつつグリフィスはもはや封建制度の存

続は新しい体制のもとでは邪魔になってきたと思った。

へ　「黄金の漆の贈物」要約。日本に仏教が伝来し、人が動物を思いやる心になる。皇后より村に寺を建てる命が出る。女の髪が運搬用の綱になる。棟木の端に弓矢を置いて悪魔を殺し、破風に鬼瓦を取り付けて火災から守る。都から内陣の職人が来て立派な寺ができる。ミミズやこおろぎなどあらゆる生き物をあわれむように説教を聴かされる。おかげで猿はいたずらのし放題、サギは農夫が土を耕す後から平気で餌を取る。ところで村の寺もインド、朝鮮、中国の寺院を旅する人には粗末に見える。1人の農夫がトンボの翅のつやで木の節跡を消し、雉の羽のつやで地味なマツ材を飾りたいと思う。「ある晩、農夫の夢に美しい白い鳥が現れ、漆の木の精といってその木の汁が仏壇をピカピカにする話をする。森で1本の木から採った白い液を掻いておくと黒い液体に変じ、それが家族みんなの目を見えなくする有毒に気づく。つぎの夢の秘密により農夫とその息子、娘は森の木の精に祈って斧を入れると、樹液は涙のごとくこぼれそこから夢の鶴が現れて樹液取りをためらう少年を励ます。それから毎夜、親子は漆を採り、その上手な利用をおぼえる。不思議とその光沢は火によらず水による。少年は漆に金箔を加えると美しいことを知り、奈良へ行って寺の装飾と仏具の職人になる。その技術は天皇の耳にとどく。金箔と漆で美しい村の寺に参る信者がつづく。しかし職人は有名になるが、気高い心で耐え抜けと励ます鶴のことばを忘れはしない。三度目の夢に現れると鶴は仏陀からの漆の木の贈物に感謝を告げる」。

この話の妖精は農夫の夢に現れる白鶴の姿をした漆の木の精であった。鶴は日本文化の美を象徴するものとして、漆器のお盆、文箱、硯箱などに描かれたものだ。福井のグリフィスもそれをよく知っていて、実際に山へ飛ぶこの鳥を仰ぎ見たり、そういう絵の漆器をもらったりもした。また寺の多い福井の町を散歩に出ては、寺の行事を参観して日本の寺の文化について知識を深めた。①から30年近くたって出版の②③の末尾をこの新作で飾ったのは、一つにはその間の日露戦争、一つに1904年出版のラフカディオ・ハーン作*Kwaidan*という2つの刺激的出来事があったからだ。これを機会にグリフィスは民話という文学形態を用いて自己の日本観を再び世に問うことにした。そこにはいつまでも変わらぬ日本への願望つまり日本万歳があった。

グリフィスと fairy-tales に関する研究の例

上記ではグリフィスの「福井民話」と呼んで6編の話を要約して短い解説を加える試みをしてみた。②③の「はしがき」によると、「生活の美しい、滑稽な、或はもったいぶった面」'the lovely, the comic, or the pompous side of life' を暗示していて、「古い日本の精神」'the spirit of Old Japan' を映していると述べる。'Old' には「なつかしい」意味もある。確かに「ロ」「ヘ」は美しい、「ハ」「ニ」は滑稽な、「イ」「ホ」はもったいぶった話におおよそ分かれる。これらの話はどれも不思議である。不思議 'wonder' が民話の生命である。なかでも「ロ」「ヘ」は妖精の白竜が人間の子どもになって空から降りる、また妖

精の白鶴は夢の中に降りるが、いずれも農夫の生活や心の大きな支えとなってそれぞれの人生を喜びにみちびくという話である。前者は素朴で美しい。後者は仏教の憐みの愛に裏づけられていて美しい。特に後者の文章が『怪談』の透明な文体を思わせて興味深い。ハーンがこの出版を期待していたころ、西洋の科学精神を武器に換えた日本が露国の国民性とどう戦うか、それはハーンにも大きな関心事であった。しかし一方ではハーンは西洋の物質主義から逃避してきた人でもあった。インド伝来と目されて日本にはいった非現実的な話をハーン持ち前の詩的想像力で妖精に変え、エキゾチックな話にした。なるほどどちらも新しい科学の進歩に関心があって、その思想の展開を主としてハーンは社会科学を、グリフィスは自然科学を対象に求めていったところが違っていた。今日では虫や魚をどんどん出場させてユーモラスな「イ」「ハ」「ニ」「ホ」のような風刺的話がむしろ好まれはしないか。『怪談』はハーンの'fairy tales'であると思うが、ユーモアやアイロニに乏しいだけに、グリフィスの「妖精話」が日本で広く紹介されてよかったのではと惜しまれてならない。

そのことでアン・ヘリング先生は*Japanese Fairy World*を「おそらく欧文による本格的な日本昔噺集の草分け」（「日本古書通信670号」）、或は「初版時分から昭和期にいたるまで、欧米諸国で出たたくさんの日本昔噺集の原点として最大の活躍をした本」（「児童図書翻訳事始」1986）であると高く評価された。先生は長く日本に滞在されて、古今にわたって日本の児童文学のすぐれた研究がある。ヘリング先生によると、この本が日本昔ばなしの種本としての影響は英語圏や独逸圏にも及んでいて、「イ」「ロ」が日本古来の噺になっている例も挙げておられる。

この反対に、グリフィスが創作した『オランダ妖精物語』*Dutch Fairy Tales for Young Folks*（1918）が日本語に訳されて『和蘭童話集』として、ラ・フォンテーヌ寓話集、ペロー童話集といっしょに『世界童話体系　第九巻』（1926）に入っている例もある。訳者は神話学者の松村武雄（1910～1969）であった。当時、松村はグリフィスをオランダ人と思っている節があり、原文の難しい文体や細密な描写の箇所を日本の読者には不要として20編の話のどれも3分の1の分量に短縮した。童話の本質を活かすためというが、むしろ本質の'fairy'そのものに対する認識不足があった。それでも訳を試みた松村武雄に感謝しなければならない。

最後に『若越民話の世界』の著書のなかで、グリフィスが福井城のお角櫓にでる怨霊のことを述べたことに着目した杉原丈夫さんに敬意を表したい。

お世話になった書目

Folk-Lore of West and Mid-Wales Jonathan Ceredig Davies, 1911. Wales
Mitford's Japan Edited by Hugh Cortazzi, 1985. London
『小泉八雲事典』2000　恒文社
『明治日本体験記』グリフィス　山下英一訳、1984　平凡社東洋文庫
『日本の昔ばなし（ⅠⅡⅢ）』関　敬吾編、1956　岩波文庫
『日本の子どもの本歴史展　図録』1986　社団法人日本国際児童図書評議会
『童謡及童話の研究』松村武雄、1923　大阪毎日新聞社
『世界童話大系　第九巻』1926　世界童話大系刊行会
『若越民話の世界』杉原丈夫、1976　福井県郷土新書3
『越前若狭の伝説』杉原丈夫編、1970　松見文庫